



## 名塩にて

兵庫県西宮市名塩(なじお)、そんなに有名な場所ではありません。関西圏の方であれば、山を削って作られたニュータウンや、高速道路のサービスエリアが思い浮かぶ程度。そこに製紙業が残っていることは、ほとんど知られていません。大阪に住んでいる筆者も、初めて訪れました。

集落に、名塩会館があります。「財産区」が建てた綺麗な建物で、その一室に資料館があります。製紙の道具や歴史と、名塩が輩出した人材を展示しています。また、別の場所には製紙学習館があり、製紙の展示と製紙体験も可能です。

2つの施設の展示によると、名塩では、江戸時代に紙を漉くようになったとのこと。50~100人の業者がいました。原料は雁皮。泥を漉きこむのが特徴で、丈夫で高品質な紙のため、多くの藩札に用いられたそうです。大正時代には、130軒を超える製紙業者が栄えました。現在では、2軒だけです。金箔の間合紙や文化財の補修紙など、特殊な用途に使われています。1980年代には紙漉き唄が収録されています。現在、歌える方がいるのかどうかは確認できませんでした。

同時に、名塩は適塾の緒方洪庵の妻、八重の出身地。その縁もあり、適塾の第6代塾長である伊藤慎蔵が招かれて、蘭学塾を開きます(福沢諭吉が第10代塾長)。もしかしたら、三田谷啓(さんだやひらく)も塾と何らかの接点を持ったのかもしれない。

中嶋哲夫の「人事も歩けば」



▲郷土資料館のある名塩会館

三田谷は農家の生まれです。学を志し18歳で大阪に出て医学を学びます。富士川游(医学者、医学史家)を師とし、ドイツに留学後、治療教育学を実践しました。クリスチャンです。大阪市に児童相談所や少年職業相談所を開設、知能検査の実践や母親教育にも熱心に取り組みます。昭和2年には、芦屋市に「コドモの学園」を開設しました(三田谷治療教育院として現存)。

三田谷は、職業指導を日本で最初に行った人と認知していましたが、今回、それに加えて、医学をもとに社会教育を実践した人物であることを知りました。社会保障や障害者教育、職業安定などの制度がない時代に、その課題に取り組んだ人物。教育と職業、社会と教育、障害者と社会の橋渡しなどの現代的課題に、実践家として取り組んだ先達です。専門性を武器に、問題解決に立ち向かう人材のイメージが、思わぬ場所でも得られました。

(MBO実践支援センター代表 大阪商業大学特任教授)